

## 夜不成寐（夜半惊醒）（二）

作者：佚名

译者：尹蕾

六、中の君、大厄の年にあたる対の君  
献身する

男君、太郎は左衛門督かけたる中納言、二郎は右宰相中將にてぞ、ものしたまふ。「中君こそ、さしならべたらむに、いますこし、あはひよからめ」と思しながら、姉君は、え引きこし給はで、かたつ方の御心には、「いかでこれにおとらぬ様にも、とりつづき見てしがな」と、思しみだれたるに、七月一日、いとおどろおどろしき、もののさとししたり。おぼしおどろきて、物とはせ給へば、「中の姫君の御年あたりて、おもくつつしみ給べし」となん、あまたの陰陽師かむがへ申たり。「御かたちありさまの、めでたくすぐれて、この世には経たまふまじきにや」と、あやうくゆゆしう見奉り給ふに、かかれば、おぼしさはぎて、ちかくなりぬる御急ぎにそへても、この御祈りはさまざまにはじめ給ふ。

母上の御兄、宰相といひし人の、女二人、男子一人ありしは、法師になりて、山に、このごろならびなき智者験者にて、法性寺の別當かけたる僧都の位にてあり。女は但馬守なる人の妻にて、こどもなどあまたいできて、さるかたに、したたかなるさまにありつきたり。妹は、故上の、子のやうにておほしたて給しかば、上うせ給てのち、君だちの御具になりて對の君ときこえて、ものし給。この殿もさびしきひとり寝のおりおり、うちしのびたちより給ふを、女、よにしらず、はづかしくかなしきものに思ひて、あながちに、さりげなくもてなして、君だちの御方はなれず、おもひ後見きこゆるなかにも、大姫君は、やむごとなき御乳母もそひ奉りて、殿の御つれづれのおりおり、つかひなら

六、二小姐遭厄年<sup>[1]</sup> 对君为之  
献身

太政大臣家の公子中、大公子是中納言兼左卫門督、二公子は宰相右中将。太政大臣心想，“小女儿与关白家的权中納言结成夫妇才更般配。”可是又不能抛开大小姐，让二小姐先结婚，只能在心中默念，“要想办法让小女儿也得到不亚于大女儿的幸福婚姻。”在这烦恼的关头，七月一日，出现了非常不吉的先兆。大臣心下吃惊，令人占卜，多位阴阳师都上禀道：“二小姐因遭遇厄年，应坚守己身。”大臣心想，“二小姐的样貌身姿都过于出色，在此世间恐怕难长久。”大臣正焦虑不安之际，又遇到如此凶兆，心绪不宁，在忙于大小姐婚事准备的同时，也派人为二小姐进行各种祈祷。

大小姐、二小姐的亡母之兄，被称为宰相，他有两个女儿，一个儿子。那儿子出家做了法师，近来在比叡山修行，成为了无人可比的知识僧和法力高强的行者，兼了法性寺的别当，并身居僧都之位。两个女儿之中，大女儿成了但马守的妻子，生了很多孩子，相对的经济上很宽裕，过着闲适的日子。小女儿以前被太政大臣的夫人当作自己女儿一般抚养，夫人去世后，就与小姐们作伴，还是留在府邸中，被人称为“对君”。太政大臣有时孤枕难眠，也会悄悄去对君处拜访，她深感羞耻，为自己的遭遇悲伤哀叹。对君强忍心情，装作若无其事一般，也不离开小姐们的身边，尽心照料她们。大小姐身边服

[1] 大厄之年：厄年是阴阳道中指会遭遇诸多不幸的年份，一般男子 25 岁和 42 岁，女子 19 岁和 33 岁。其中，男子 42 岁和女子 33 岁被称为大厄之年。

はしなどし給へりけれど、この君の、いとわかう、あてやかにおかしきに、思しうつろひたるやうなりければ、いと心よからぬ物に思ひて、「今北の方」とつけて、きしろひおとしめられて、いみじくはづかしく、わりなければ、あの御方には、今となりては、いたくも見なれ寄らず。中君には、いとよかりし御乳母もなくなりて、大人大人しき後見もなきままに、心うつくしう、ひとへにうちとけ睦みおはしたるが、いとあはれにおぼえて、心やすくもあれば、ただこの御身にそひて起きふし給を、大臣も「いとよかんめり。この御方にあづかりて、思し後め」とて、よろづにうちあづけ給へれば、こなたがちにおもむき果てにたれば、いと聞きにくさまされど、聞きしらぬさまにて、らうたく心ぐるしきありさまをうち語らひて、憂きもつらきも、なぐさめ給ふ。

### 七、中の君九条へ方違え

法性寺の僧都、九条にいとをかしき所領ずるを、ときどき心やすき所にてぞ、對の君まかでなどしける。殿の御いそぎちかうなりわたれば、いと物さはがしう、おほかたなれば、かたき御物忌にてあしかるべければ、所さりて忌み給べきなれば、「そこにて」とて、對の君ばかりをそへて、いといみじく忍びて。この夏、但馬守の女、婿とりせむとてかしづくも、あたらしきところにわたすべきも、方のふたがりければ、四十五日違へに、そこにぞあらせける。母君まかりかよひ、よそ人にもあらねば、女もやがて御前に参りて、めでたくおかしげなる御さまを、あくれかくて見ばやと、わかき心地には思ひけり。かたみになつかしく思えて、風すずしく月あかき夜、山里めかしくおもしろき所なれば、端ちかくいざりいでて、物語などし給ひつつながめ給。御物忌は十七日なりければ、これは十六日の夜なり。

### 八、中納言、たまたま東隣に乳母を見舞う

東に、ただ呉竹ばかりをへだてたる所に、左大臣殿の中納言殿の御乳母の月ごろわづらひけるが、爰にわたりて尼になりにける、とぶらひに、それもけふの、いみじくしのびやかにておはしたり。「あかずいみじ」と思ひきこえたるも見すぐしたがたく、ほどなくかへ

侍的是颇有身份的乳母，以前大臣无聊之际，也经常召她来伺候。相比之下，对君年轻漂亮，气质高雅，大臣移情别恋之后，乳母对她深为嫉妒，甚至还给她取了个“现任夫人”的浑名，将对君视为仇敌。对君不胜其扰，对大小姐也敬而远之。二小姐的乳母性情温和，只是刚刚去世，如今二小姐身边没有一位稳重可靠之人。而且二小姐一直与对君甚是亲近，对君也很喜爱二小姐，与之在一起内心很放松，因此只是一味地在二小姐身边侍奉，太政大臣也说：“此事正好。今后你便专心在二小姐处服侍吧。”万事都拜托给她，从此她更是一心一意在此处，大小姐处的乳母们风言风语愈演愈烈，对君只是装作不知，一心亲近挂念可爱的二小姐，烦心事和痛苦的事都以此慰藉。

### 七、二小姐去九条避方忌

法性寺僧都在九条拥有风雅的宅邸，将彼处当作休闲之所，有时对君也会去那里。太政大臣家大小姐的婚礼临近，众人手忙脚乱。二小姐的斋戒防范，容易变得疏忽，因为是重要的斋戒，大家都忙于准备婚礼，无暇顾及，因此二小姐必须离家去别处斋戒。“如此一来，去九条吧。”因此，二小姐只带了对君一人，悄悄地移去那边。但马守之女，正好这个夏天招了女婿，一直被宝贝养育的女儿也移去新居，因为方角有忌讳，因此为了避方忌，有四十五天也要在九条宅邸度过。其母亲为看望女儿，经常来九条，她与二小姐及对君也有亲戚关系，其女也顺理成章地到二小姐身边伺候。这女儿被二小姐优美身姿所吸引，内心盼望着可以天天目睹其风采。二小姐与这女儿关系日渐亲密。凉风习习，月色明媚之夜，乡间景色宜人之处，两人对坐走廊边，边闲谈，边赏月。二小姐的斋戒是十七日，这是十六日夜晚的事。

### 八、中纳言偶然去东临看望乳母

僧都家与东边邻家，只用吴竹的围栏隔开，住的是左大臣家中纳言的乳母。乳母这数月因病卧床不起，移居此处削发为尼。为看望乳母，中纳言正巧今日偷偷来此。老尼不住地唠叨：“离别悲苦，遗憾之极。”中纳言也不忍弃之

り給はむも心ぐるしう思されければ、その夜たちとまり給ひつるに、夜ふけて人しづまりぬるほどに、いとちかく吹きかふ風につけて、琴の聲ひとつに掻きあはせられて、いとおもしろく聞ゆるに、おどろき給ひて、「あな、おぼえな。たが住むところぞ」と、とはせ給へば、御乳母の少納言行頼ときこゆる、「法性寺の僧都の領する所には、この水無月より、いまの但馬守時明の朝臣の女なむ、わたりて住みさぶらふなり。月あかき夜は、かくこそあそびさぶらへ」と、きこゆれば、「それが女どもは、かかることやこのむ。思はずのことや」と、のたまへば、「かやうにいであてときどきあそぶ見給ふるに、いづれも目やすく見給ふる中にも、源大納言の子の辨少將に契りてかしづきさぶらふ三にあたるは、すべてまことしく、優げなる氣色になむ。式部卿宮（の）中將、石山に参りて、ほのかに見て、文などさぶらひけるを、女は返事などして、それに心よる氣色にさぶらひけれど、かの中將の、「しのびてときどきかよはむ。親に知られて、あらはれてはあらじ」と、さぶらひければ、親どもようながりて、辨少將に契てさぶらふなり」と申せば、わらひ給て、「さては、女は本意ならずやおもふらん。心ばせあるもの也。中將に心よすらん」と、のたまひて、竹のもとにあゆみよりて給て聞き給へば、琴の聲はいとよく掻きあはせられて、中にも箏の琴のときどきかきまぜたるは、いとすぐれてきこゆ。

### 九、中納言、中の君を垣間見て美しさに驚く

こなたもかなたも、竹のみしげりあひて、隔てつきづきしくも固めず、しどけなきに、行頼おしあけて、「おなじくは、これよりいらせ給へ」と申せば、「人や見つけむ。かろがろし」とはのたまへど、箏の琴は、弾くらん人ゆかしく心とどまりて、やをらいいり給へれど、こなたも竹おほしくしげりて、よこたはれ廣がりたる松の木のかげにて、人見つくべくもあらず。軒ちかき透垣のもとにしげれる萩のもとにつたひよりて見給へば、池、遣水のながれ、庭の砂子などのをかしげなるに、簾まきあげて、卍にいまぞをよぶらんと、おぼゆるほどなる人、高欄のもとにて和琴をひくあり。

不顾，来了马上便走觉得老人实在可怜，便决定今夜在此留宿。夜深人静之时，听着附近吹来的风中夹杂着合奏的琴声，琴声浑然一体十分美妙，不由得侧耳倾听起来。“实在是意想不到。究竟是何人住在此处？”中纳言问身边侍奉的人。他的乳母子被称为少纳言行頼，回答道：“那是法性寺僧都名下的宅邸，从今年六月起，但马守时明朝臣的女儿移居此处。值此月明之夜，合奏乐曲为乐。”中纳言说：“但马守之流的女儿们，喜好这样风雅的游乐吗？真没想到啊。”“像今夜这般来到走廊边，弹奏乐曲之时，哪一位都令人觉得美貌无比。其中，已经与源大纳言之子辨少将缔结婚约，一直被父母疼爱的三女儿，应是各方面最为出众的。我听说，式部卿亲王家的中將<sup>[1]</sup>在去石山参拜时，依稀看到了此女的容貌，便派人送去情书，那三女儿也回信了，一副对中将心有所属的样子。可那中将却说，‘我还是偷偷去见你吧。不能让父母知道，将此事公之于众。’因此，女方父母认为此事不可取，便替她跟辨少将订了婚约。”中纳言听了笑笑，说：“这只是她父母的一厢情愿，不是她本人的意思吧。这是个多情的女子，她明明对中将一往情深。”说完，向宅邸间的吴竹围栏靠近，侧耳倾听，琴声合奏非常美妙，特别是箏琴的音色格外动听。

### 九、中纳言窥见二小姐惊为天人

两个宅子之间并无围墙，只以竹林相隔，行頼将竹丛分开，说道：“既然要听，不如靠近一点的好。请从这里进去吧。”中纳言一边说着：“被人看到不太好吧。太轻率了。”一边却被悠扬的琴声所吸引，心中想着一定要见见弹琴之人，便悄悄地走了进来。此处竹子多且茂密，还有松树枝伸展过来，正巧树阴处不会被人发现。透过房屋附近的篱笆处茂密的萩草，能看到庭院中的池塘、溪流，铺设的细砂，皆十分雅致。正对庭院的房间，卷着帘子，首先映入眼帘的，是一位看似三十岁的年长之人，

[1] 式部卿亲王是源太政大臣的兄弟，前文出现过。他的女儿是承香殿女御。因此他的儿子中将是女御的兄弟。式部卿亲王的作用，类似于《源氏物语》中的头中将。

頭つき・容體ほそかに、しなじなくきよなるに、髪のいとつややかにゆるゆるとかかりて、めやすき人かな、と見ゆるに、むかひざまにて、紅か二藍かの程なめり、いとしろくすきたる、このましげなる人、すべりおりて、長押におしかかりて、外ざまをながめいでて、琵琶にいたく傾きかかりて掻きならしたる音、聞くよりも、うちてもてなしたるありさま・かたち、いと氣色ばみ、なつかしくなまめき、こぼれかかれる額髪のたえまの、いとしろくをかしげなる程など、まことしく優なる物かな、と見ゆるに、箏の琴人は、長押の上にすこしひきいりて、琴はひきやみて、それによりかかりて、西にかたぶくまに曇りなき月をながめたる、このみたる人々を、をかしと見るにくらぶれば、むら雲のなかより望月のさやかなる光を見つけたる心地するに、あさましく見をどろき給ぬ。「これこそは、行頼がほめつる三の君なめれ。長押のはしなるは、姉どもなめり。これこそ、そのきはの勝れたるならめ。いかで目もあやにあらん」と、まもるに、「かたちは、やむごとなきにもよらぬわざどかし。竹取の翁の家にこそ、かぐや姫はありけれ」と見るにも、このほどのさまは、なめづらかなり。

契やありけむ、こよひは過すべうもあらねば、やをらたちいで給ひて、行頼に、「この竹のなかにかくれて」といひて、かへりいりて見給へば、和琴の人は、いりにけり。琵琶・箏の琴の人は、物語り忍びやかにしつゝながむめり。人は池のわたりなど涼みありくなるべし、そなたに聲などあまたして、いとしづやかなるに、「ゆくりなく、あはつけき振舞は、をのづからかろがろしきこともいでくるを」と、ありがたくおぼしおさめたる心なれど、我ながらあやしくしづめがたきを、人の程を、こよなき劣りとおもふに、あなづらはしく、「こよひをすぐしてまた言ひよらん風のたよりも、さすがにあるべきやうもなし」と思しよりて、月かげのかたによりて、やをらいいり給にけり。

正在阑干处弹着和琴。此人身姿纤细，气质高雅，十分优美。不仅如此，她的头发光泽柔顺，让人看着非常舒适，还有一位与她相对而坐的女子。因为月光的关系，虽然看不真切，她身上大概是红或二蓝配色的衣服，肌肤白嫩透亮，是位美人。她从帘子里出来，倚靠在廊间的横木上，向庭院中眺望。听到琵琶那终极的音色，又看到她本人的容貌姿态，两者合二为一之时，感到她实在与众不同，不由被她那种稳重所吸引。她蓬松的额发中露出的额头，也是白皙而动人，实在是位清秀的美人。那么，一直心中记挂的那位弹琴的女子在何处呢？她坐在横木靠内一侧，刚刚弹奏完，顺势倚在琴上，眺望着渐渐西斜愈发澄净的月亮，她的美丽十分出众——与刚才两位女子相比，就如同在云中发现纯洁的满月之光一般，中纳言被这意想不到的美丽惊得目瞪口呆。“此人一定就是行赖夸赞的三小姐。在横木边缘的是她的姐姐们吧。她们这样的在受领家算得上出类拔萃的美人吧。”一直目不转睛地看着，“容貌身姿与家世背景真是毫无关联呢。这正如卑贱的竹取翁家才有辉夜姬一般吧。”一边这样想着，觉得映入眼中的女子之美，简直无法用语言来形容。

不知是否因为前世有缘，中纳言并不想今夜就此错过，轻轻地从荻草丛中站起，对行赖说：“我在竹林中再多看一会儿。”说完，回到刚才的竹影处隐身观察，而演奏和琴之人回到里屋去了。琵琶和箏的弹奏者似乎一边低声交谈，一边赏月。其他侍女似乎去池边纳凉，池塘方向变得人声嘈杂，而这边则一片寂静。

“突然的轻率举动，自然会引起草率的事情发生”，平日里拥有优于常人的自制力，意志坚定的中纳言，只有今夜变得不能自己，连自己都觉得不可思议。或许因为想着对方的身份远远低于自己，变得看低对方，认为无需客气。

“若是错过今夜，以后再慢慢接近，这样的好机会，怕是再也不会有了。”他这样想着，从竹影处走到月光下，悄悄地进入了房内。

未完待续

原文出自小学馆《日本古典文学全集》19《夜半惊醒》（1974年）

译者简介：尹蕾，中南财经政法大学外国语学院日语系讲师，研究方向为日本古典文学、日本古代史。